第7回「京都観光振興計画2025」マネジメント会議

1 日時

令和6年9月10日（火） 13時～15時

2 場所

QUESTION（クエスチョン） 7階 CREATIVE COMMONS（クリエイティブコモンズ）

3 出席者

別紙名簿参照

4 内容

【委員長挨拶】

（若林委員長）

本日は、「観光が回復する中、コロナ禍以前から課題であった観光課題等への対応をどう進めるか」「持続可能な京都観光の実現に向けての取組をどのように進めていくか」について議論・意見交換していきたい。

また、来年度には次期観光振興計画に向けた議論もあることから、持続可能な京都観光を具体的に実現するための「指標・目標値」のあるべき姿に関する御意見についても伺いたいと思う。

【報告事項】

- ・京都観光を取り巻く現状について（京都市から説明）
 - (1) 「令和5年 京都観光総合調査」の結果について
 - (2) 「京都観光振興計画2025」指標・目標値の現状について
 - (3) 令和6年度 第二次編成予算における観光関連事業について

【協議事項】

- (1) 「4 報告事項」に対する御意見及び今後の取組等について
- (2) 指標・目標値の検討について

【報告事項全般に関して】

（小野委員）

宿泊客数が増加していることについて、大変嬉しく思っている。修学旅行生数が令和元年比で10万人以上増加している点は少し驚いているが、年々出生数が減少していることもあり、将来的には大変厳しい状態になると想定される。有益な情報の提供や、学校関係者・旅行者等と話し合いを重ねたうえで、適切な対策をお願いしたい。

令和6年度の主な取組にある「時期・時間・場所の分散化」は非常に重要である。時期に関しては、京都・花灯路に匹敵する夜間のイベントを考えても良いのではいか。時間に関しては、夜観光のコンテンツをできるだけ早く造成していただきたい。文化芸術にこだわらず、外国人観光客が理解できる娯楽主体のコンテンツを考えても良いのでは。夜間、シャッターの閉まった四条通や河原町通で多くの外国人観光客を見かけるが、彼らの夜の時間の使い方を調査し、それに沿ったサービス提供をしていくべき。商店街の閉店時間を1時間でもずらすことができれば、街の活気も増す。最終的には、家

族全員が一日中楽しめる京都を目指したい。

次に、本年6月に新設された観光特急バスについて、乗客数や利用者の反応・満足度などが分かれば教えてもらいたい。荷物を預けた方にインセンティブを与えるなど、手ぶら観光と連動した取組ができると良いのではないかな。

また、前回会議でも取り上げたが、パークアンドライドの推進は大変難しく、そもそも観光客のニーズに添えていないように思う。観光地周辺の細街路には「他府県ナンバーの進入禁止」という規制措置を設けてもいいのでは。

宿泊施設等巡回バスの導入実証については、小規模な宿泊施設にしわ寄せがないように検討していただきたい。

市民の共感の輪の拡大については、観光がもたらす効果を市民に伝える手法として、紙媒体やHP等による周知だけでなく、市長や市議員等が直接市民にお伝えする機会があれば、より一層浸透するのではないかな。

最後に、指標・目標値については、観光客・地域住民・観光関連事業者のそれぞれの意識を重要視するような目標値を設定することが必要。また、現在の指標等について、進捗率や数値の変動及びその理由を検証して欲しい。

(加藤委員)

京都観光総合調査の結果について、「訪問地の生活を守りたい」「地域を思いやる行動をとった」等の調査項目は非常に重要。同様の調査がないため他都市比較はできないが、非常に良い結果だと考えている。更に深掘りし、具体的な行動内容を把握することが、今後重要ではないかな。

また、この結果を市民にお知らせすることが、観光の効果の見える化や、ひいては観光に対する市民の共感につながっていくのではないかな。併せて、市は京都観光モラルの推進宣言事業者や優良事業者表彰等にも取り組んでいることから、これら事業者側の取組との連動性を示していけるとより一貫性が出てくる。

反対に、残念なこととして「混雑」が挙がっている点について。実際に残念と感じた方に、混雑を避ける方法・選択肢等の周知ができているのか、その点の調査ができると良い。時期・時間・場所の分散化について、具体的な選択を行った方の調査ができれば、より効果的な分散の方法が見えてくると思うので、今後の工夫が必要。

令和6年度の主な取組について、やはり京都観光モラルの推進が非常に重要だと感じる。

まち歩きイベントについては、「京都を語れる方」がどれだけいるのかが重要。フィンランドでは、地域に精通したフィンランド人を1日レンタルできる「Rent a Finn (レント・ア・フィン)」という取組があるが、京都でも「京都を語れる人」がもっと見えるようになると良い。

京都駅を介さないルートについては、実際にどの程度可能なのか。ジャパン・レール・パスの利用状況やJR以外のルートからどのように入浴できるのかを知りたい。併せて、手ぶら観光の利用率や、ライブカメラ等の混雑状況の見える化に関する事業効果についても教えてもらいたい。

修学旅行に関しては、京都ならではの伝統文化とサステナビリティという組み合わせが、より京都らしく価値のある題材になると思う。

この他、岡山真庭市の「観光地域づくりマネージャー」制度や、札幌市の「さっぽろラウンドウォーク」アプリなども効果的な取組のため参考にされたい。

(事務局)

ジャパン・レール・パスの利用状況については、把握可能かどうかも含めて確認する。

手ぶら観光の利用率については、京都観光総合調査において令和5年から調査を開始しており、令和5年は、外国人観光客の約2割が手ぶら観光サービスを利用されたとの結果となっている。

混雑状況の見える化については、ウェブサイトの閲覧数は令和5年度76万件であり、アンケート結果では、閲覧者の約半数が同サイトを確認した後、訪問エリアや訪問時間帯を変更したとの結果となっている。

(高橋委員)

京都観光総合調査の結果について、宿泊観光という観点で見ると、外国人観光客の宿泊代（外国人宿泊客数×外国人の一人当たりの宿泊代）が、日本人比73%と、日本人と同額まで迫ってきている。恐らく将来的には他の地域も同様の形になってくると思うが、最初に京都市がそのような状態になっていることは非常に重要。だからこそ、京都観光に関わる指標・目標値を改めて整理する必要がある。

以下、現在の重点指標に沿って、気付いた点を指摘する。

「「とっておきの京都」プロジェクトの対象エリアに来訪した観光客の割合」が落ちているが、コロナ禍からの回復に伴い「主要観光地に行く」流れが全国的にあるため、今回は仕方がないと思う。全ての観光客を分散化させることはできないため、エリアにマッチしたターゲットがどういう観光客なのか、どのような時期・時間・目的が良いのかをより明確にし、総花的な指標ではなく、ターゲットに合わせた指標にしても良いように思う。

「外国人の市内交通費単価」が増加したことは良い傾向だが、その理由が明確になると良い。恐らく周遊する観光地点が増加したか、移動距離がより長くなったからではないか。

「日本人の文化体験の割合」が減少している点について。全国的にも、体を動かさずアクティビティ体験が増加傾向にある中、物を見るような体験は伸び悩んでいる。ただ、その中でも京都市は減少傾向にあるため、原因の検証が必要。

「観光消費額単価」が増加している点については非常に素晴らしいと思う。宿泊単価は当然ながら、恐らく全体的に旅ナカ消費の単価が上がっているのではないかと。今後は、実際に従事者の給与にどの程度反映されているかも重要になってくる。

「外国人観光客の満足度」については、「大変満足」の割合が非常に伸びている。調査結果の概要資料も「総合満足度」ではなく「大変満足」の値を採用してもいいのではないかと。

「平均宿泊日数」について、令和5年の全体の平均宿泊数は1.61泊で、全体で見ると令和元年比横ばいだが、日本人観光客の平均宿泊日数は令和元年比で減少しているため、対策を考えていく必要がある。

次に、令和6年度予算について。

「観光効果の見える化・観光への市民共感」促進事業は非常に重要な事業だと考えている。観光効果の見える化に当たっては、市民が実際の生活の中でイメージしやすい情報を提示する必要がある。

「タクシーの台数が多い」「市バスが短い間隔で運行している」「飲食店が多い」等の環境は、観光需要があつてこそ成立しているものであり、そういった点を丁寧に発信してもらいたい。併せて、小学生や中学生等の子ども世代にどう伝えるかを分けて考える必要がある。また、割引特典等の市民向けサービスを主体的に提供する事業者の情報を発信することも重要。東京スカイツリーは、開業から現在まで、墨田区民であれば3割引で登れる取組を行っている。区民が観光客と一緒にスカイツリーに登り、自身の地域のことを説明すると、観光客だけでなく区民も自身の地域を自慢でき、双方の満足度が高まる。このように市民・観光客双方の満足度を高める取組がこのサービスの中で実現できると

良いと思った。

「朝・夜観光等コンテンツ造成事業」については、京都観光N a v i のイベント情報の中で、朝と夜に体験できるコンテンツにアイコンをつければ、朝・夜観光の推進につながるのではないかと思う。

「高付加価値な文化観光推進事業」については、単発で終わらせず、しっかり継続しつなげていくことが大切。

マナー啓発については、旅ナカでの啓発も重要だが、例えば「東京から入浴する外国人観光客は東京駅のどこを目にするのか」を考えるなどの入口戦略が必要。日本人にもマナーを伝える取組は非常に良いと思う。

(濱崎委員)

柱2「京都の「光」の磨き上げ・観光の質の向上」の重点指標が、観光消費額単価やリピーター率、宿泊率、平均宿泊日数だけであり、これだけで観光の質を評価するのは少し間違っていたと感じた。重点指標以外にも指標があることは理解しているが、違和感がある。

京都の「光」をどう磨き、どう見せるかという点は非常に重要で、例えば令和5年の平均宿泊日数が1.61泊というのも短い印象である。京都の文化をしっかりと見て、理解いただくために必要な宿泊数が何泊なのか、一定の共通認識が整理できると良い。その中で、夜のコンテンツもできていくのではないか。併せて、旅館・ホテル等の従事者から、分散化や長期滞在に資する提案を観光客に向けて発信できると良い。そういった趣旨で事業者向けのヒアリング等を検討してもらえると有難い。

先日、寛永行幸四百年に関連するファミトリップを開催し、非常に好評だった。普段はあまり人が来ない隠れた場所に焦点を当てることは、市民が京都の魅力を再発見する喜びにもつながる。京都の魅力に対する光の当て方は様々あり、やり方次第で分散化につなげることもできる。コンテンツの造成主体は問わないが、府市のサポート体制も活かしながら、分散化や市民共感などに資する優良なコンテンツが広がると良い。

(若林委員長)

京都観光N a v i や万博関連サイト Expo 2025 Official Experiential Travel Guides など、観光コンテンツを発信する場は沢山あるため、そうした既存の媒体も活用し、ひとつでも形にしていけると良いと感じた。

(事務局)

観光客の宿泊日数について補足すると、「京都観光総合調査」において各宿泊日数の構成割合も調査しており、日本人の宿泊客のうち最も多い泊数は1泊で46.7%、次に多い泊数は2泊で34.7%。外国人の宿泊客のうち最も多い泊数は3泊で22.2%、次に多い泊数は5～9泊で21.0%となっている。

(若林委員長)

日本を5泊以上で観光する外国人が多い中で、旅程の一部を京都で過ごす観光客もいれば、ほぼ全行程を京都だけで長期滞在する観光客も一定割合いることが分かる。外国人観光客の行動パターンとして参考にしていただきたい。

(渡辺委員)

市民の観光に対する共感を高めるに当たり、2つの方向性があると考えます。

1点目は、市民に対し、京都観光が京都市にどのような利点を生み出しているかを明確にし、見える化すること。2点目は、市民の声をより積極的に施策に反映していくことである。

1点目の見える化に関しては、観光に興味・関心がある市民は自ら調べて情報を得るが、そうではない方もいる中で、どのように見える化していくかが重要。

2点目の市民の声をより積極的に反映していく方法については、今後更に工夫の余地があると思う。現状、市民公募委員制度のほか、意見募集フォームにおいて意見を投稿できるとのことだが、時間や手間がかかる印象があり、よほど強い思いがある人は声を上げるが、少しの違和感を持っている市民は声を上げるに至っていない状況にあると思う。「観光効果の見える化・観光への市民共感」促進事業の中で簡単なフォームを設ける等により、気軽に声を届ける場所があると良い。また、市民が京都観光を体験する機会を設けることも予定されているが、そうした場を生かして、市民と観光事業者が対話できる場を設けてはどうか。市民としては、どういう人が観光事業に従事していて、現場でどういったことが行われているのか分かっていない。体験して終わりではなく、実際に感じたことを気軽に言える場があれば、市民の声を施策に生かすことができるのではないかと思う。

(若林委員長)

対話の重要性は同意。対話で相互理解・信頼を高めながら共通のビジョンをもって対策を進めることが、諸問題の解決に向けたスタンダードなアプローチだと思う。対話の場づくりには繊細な設計が必要。

(田中副委員長)

観光消費額が1.5兆円を上回った要因の1つとして、円安の影響で外国人観光客の観光消費額単価が増加したことが挙げられる。「日本人が外国人の観光需要に押し負けている」との報道も一部であったが、統計上は、コロナ禍以前と比較して、日本人観光客数は5%未満の減少幅にまで回復しており、観光消費額単価も10%以上増加している。これは、むしろ、特に経済的に余裕のある観光客から京都観光は継続的に選ばれている状況と解釈でき、観光の質を高める取組を推進してきた成果ともいえる。他方、全国的には人口減少に伴う日本人観光客の減少が懸念されており、今後、このように二極化していく市場に対応できるよう、文化観光の推進や観光情報の発信等を、ターゲット別に展開していく工夫が必要である。

観光課題について、一部の時期・時間・場所への集中は喫緊の課題と受け止めている。需要の分散化やマナー啓発に関する取組は春・秋の繁忙期に集中する観光客を対象に実施する必要があるが、年度の狭間に当たる春の観光課題対策に係る取組が難しい。単年度予算主義の原則から一定仕方がない部分もあるが、春の時期にも対応できる予算措置の仕組みが重要だと感じる。

【指標について】

(加藤委員)

資料4にある3点についてコメントする。

「市民、観光客、観光関連事業者・従事者の各者に関する視点」については、地域への貢献度がより可視化されると良い。経済効果だけでなく、文化や伝統産業、環境への貢献など様々あるが、指標として地域を思いやる行動の詳細が具体的に見えてくると良いと思う。また、迷惑を感じた市民の割合だけでなく、その迷惑が何らかの形で解消されているか、解決策の周知・認知状況まで把握できるとより良い。京都観光モラルに取り組む事業者数も大切だが、それ以上に、観光客にいかに伝わっているかが重要。

「観光の安心・安全、危機対応に関する視点」については、公共交通機関の利用促進と同時に、市全体のゼロカーボン関連の指標と連動したものになると良い。

「MICE振興の視点」については、京都市の特徴でもあるユニークベニューの選択や、サステナビリティへの配慮といった点が重要項目であり、こうした視点を伸ばすことで、MICEの中でも京都らしさが強調されていくのではないかと。

(若林委員長)

観光客にいかに関わっているかという御意見に関連し、指標に関するデータを調査した後、それをどう活用するかが大切であり、指標そのものの見せ方と活用方法について考える必要があると感じた。

例えば、持続可能な観光に対する意向調査では、日本人以上に外国人観光客の方が高い関心・意識があるという数字が出ている。観光客自身の気づきとなるように、例えば、日本語・英語・中国語のポスターをホテルに掲示する等の取組も一つかもしれない。

(高橋委員)

これまでから、市民、観光客、観光関連事業者・従事者、未来の「四方よし」の各観点を大切にしながら政策を進めてきたが、今後、このバランスが更に重要となる。

現計画では、コロナ禍において全体を俯瞰する意味で網羅的な指標を設定した経過があるが、改めて、今後、何を大切にするのかをより明確にすべき。これは一旦網羅的な指標を立てたからこそできる議論である。指標としてしっかり見ていくべき「政策的指標」と、参考的に見ていく「個別指標」をしっかりと分けることが必要。今後の観光政策において何を目指すかに特化した方が、より市民にも伝わる。個人的にはここまでの指標数は不要と思うが、各指標の要否は個々に議論していく必要がある。

その上で、各論では、市民生活と観光の好循環に関する指標や、市民の共感の輪、京都の「光」の磨き上げに関する指標が必須。担い手に関しては、2030年に向けて人材不足が重要な課題となるため、この点は新規事業といわず通常の事業としてしっかりと考えるべき。人材の確保や育成、定着という観点と、現計画策定後のトレンドとして、生産性向上や人材不足解消につながるDXに関する観点も必要である。

観光客の満足度については、日本人・外国人共に9割超と高止まりの印象があり、例えばリピーターの満足度に絞る等も一案。

量に関する指標については、観光客数はあえて重点指標としないといった議論もある。むしろ、年間、曜日、時間帯別のバランスなどを見ていくことが重要である。

(濱崎委員)

量ではなく質をどう評価したら良いか悩ましい。残念な部分について、何が残念と感じたか、もう少し細かく聞いてみることも良いのではないかと。

(渡辺委員)

指標・目標値をもう少し絞っても良いのではないかと。市民目線では少し読みづらいと感じる。重点指標の数を絞るなど、もう少しわかりやすく、ぱっと目について数値が分かるようにすることも有効だと思った。

また、現在、市民生活と観光の調和について、観光に対する市民意識を調査されているが、市民の観光に対する理解度のようなものが客観的に分かって面白いと感じた。仮に理解度が低いようであれば

ば、周知不足との判断もできる。

(小野委員)

市民の共感の輪の拡大について。「何割の市民が観光客を歓迎しているのか」「観光客を歓迎する機運を醸成するにはどうしたら良いのか」「障害になっているものが何なのか」「その障害を取り除くために何が 필요한のか」といった観点を示すことができる指標があると良いと思う。

また、リピート率については、現状、最大「10回以上」という聞き方をしているが、「15回」「20回」と更に深掘りし調査しても良いのでは。訪問回数が2回の観光客と20回の観光客では、違う観点で京都に来られていると思う。この点も考慮して指標を検討していけると良い。

(田中副委員長)

各委員からの指摘のとおり、少し数が多い印象がある。一方で、個別で見えていくとそれぞれ重要な指標でもある。以下、気が付いた点を柱毎に申し上げる。

柱1「市民生活と観光の調和・豊かさの向上」については、少し市民の主観に関する指標が多い印象がある。市バスの積み残しの発生回数や乗車待ちの時間等を定点観測し、客観的にモニタリングしても良いのではないかと。

柱3「担い手の活躍」については、経営実態、観光サービスの供給状況、雇用状況を評価する指標を設けた方が、政策に反映しやすいのではないかと。平成24年に国が実施した「観光地域経済調査」では、事業者数や従事者の数、売上高、取引先地域等を網羅的に調査しているため、参考にしてはどうか。

柱4「危機に対応でき、安心・安全で持続可能な観光の推進」については、現在、BCPの策定状況が指標となっているが、BCPは事業者によって完成度が異なるため、一概に評価が難しい。例えば危機発生時の初動対応と平常時に戻るまでの対応を区別した危機管理体制の状況を調査したり、発災時の危機管理マニュアル・危機管理規程の有無等についてチェック项目的に調査すれば、当該調査を通して危機管理意識を高めることにもつながるのではないかと。

柱5「MICEの振興」については、京都は世界でも有数の競争力のあるMICE都市であるため、しっかりと組み立てていく必要がある。MICEは観光客の滞在日数を向上させ、繁閑差を縮小し、観光消費額の増加にも貢献する重要な施策。MICE参加者は、京都の伝統や文化を尊重し、訪問後も京都にとって重要な応援者になる。調査手法等に限界があるかもしれないが、とりわけミーティングやイベントの開催場所や開催状況に関する標本調査を定点実施し、どこにニーズがあるのかを時系列で観測するなど、現在の指標より更にブレイクダウンした指標を設けてはどうか。また、MICEが市民生活の豊かさに貢献していることを評価するために、国際会議における市民向けのイベントの開催状況や参加者数を把握してはどうか。市民公開講座等を通して、市民に観光・MICEのメリットを実際に体感してもらうのも重要な取組。こうした取組を実施する主催者に向けて、助成金や補助金等のインセンティブを設けることも一案ではないかと。

(事務局)

本日御欠席の平井委員及び橋爪顧問からお預かりした御意見を紹介する。

○平井委員

観光ごみ対策について。埼玉県川越市の商店街では、街頭ごみ箱は全て撤去し、各店舗が、他の店舗の分も含めて観光客のごみを受け入れ、分別のうえ1箇所に集め、それを行政が公費で処分すると

いう取組を行っている。観光客からすると地域のホスピタリティを肌で感じることができ、街頭ごみ箱が無いことで街が綺麗に保たれ、都市格が向上する。

次に、小売業が行政の支援策の対象から漏れやすいことについて。菓子や漬物は農林水産省、工芸品は経済産業省など、所管省庁がばらばらで、「観光土産」という枠組みが存在しないということも大きな要因の一つだが、観光土産を取り扱う小売業が支援の網目からこぼれ落ちないような対策が必要。小売店の情報を網羅した情報ターミナルとなるようなアプリを提供することもその1つである。

次に、分散化について。寺社などで特別な体験ができるサービスが更に浸透すれば、混雑の解消とともに観光消費額単価の向上につながる。また、ホテルは田の字地区内に多く立地しているが、日中は田の字地区内は人が少なく、まちあるきコンテンツの充実が必要である。伝統工芸の工場も軒先を閉めて屋内で仕事をされているが、非常に勿体ない。まちなかでお金を落とせる仕組みをつくり、一箇所のサイトで管理できるような仕組みがあると良い。

最後に、誘客のターゲティングについて。ビジネスの基本として、常に3本の柱を持っておくべきであり、京都観光においては、日本人、外国人、修学旅行生をそれぞれ満遍なく大切にすべきである。例えばナイトタイムエコノミーも、外国人に向けてばかり発信している印象がある。昔から日本人観光客や修学旅行生からも「夜にやることがない」と言われており、3者それぞれに向けて満遍なく発信していくべき。

○橋爪顧問

はじめに、次期計画に向けて意識すべき視点について。

京都駅の混雑緩和では、三条京阪駅周辺の再整備を促進することが必要。北陸新幹線の駅位置の選定に際しても、京都駅の混雑緩和を前提に検討を進めるべき。仮にJR桂川駅周辺に新駅が建設される場合は、JR桂川駅及び阪急洛西口駅周辺の整備、西山の観光振興などが検討課題になる。

持続的な観光地経営では、国際文化観光都市という都市の理想を維持発展させるためにも、「持続可能なマネジメント」「社会経済のサステナビリティ」「文化的サステナビリティ」などの視点から、官民連携による「持続可能な観光地経営形成」「持続可能な観光を实践する地域人材の育成・創出」「持続可能な観光サービスを提供する事業者への支援」などに関わる施策があると良い。また、DX、GX、滞在者のウェルビーイングなどの視点等も求められる。

MICE機能の充実では、施設単体だけではなく、MICE施設を核としたエリア整備と観光地経営が必要。また、アクセスやアフターコンベンション機能も含めると、MICE施設のあるエリアだけではなく、交通結節点や、各観光地との連携も必要。加えて、スポーツMICEを考えるのであれば、スポーツ関連施設との連携も充足させてゆくべき。

気候変動や災害への対応等では、特に外国人観光客への情報提供や避難誘導が一層重要。京都市域での災害発生時だけではなく、広域での災害に対して、京都に滞在する観光客への配慮が求められる。また、夏期の高温対策など、異常気象によって発生している諸課題についても対応が求められる。

次に、京都観光総合調査の結果及び計画の指標について。

繁忙期と閑散期の差が1.4倍である点など、京都は、季節を問わず集客できる国際的な観光地であると広く認知されていることを、今回の調査結果から改めて確認できた。

「持続可能な観光に対する意向調査」に注目すると、日本人よりも外国人の方が意識が高いことが伺える。この点を市民にも広報しつつ、マナー違反する少数の外国人観光客への対応を進める必要がある。

他方、「観光客のマナー違反の行為により迷惑した市民の割合」等が増加傾向にあるため、外国人だけではなく、日本人観光客に対するマナー啓発も強化する必要がある。

「入洛時の交通手段として公共交通を利用された観光客の割合」が年次を経るたびに高くなっており、良い傾向にある。

「「とっておきの京都」プロジェクトの対象エリアに来訪した観光客の割合」が減少している点が課題であり、対象エリアでの施策の拡充が重要。併せて、洛南、洛北などエリアの追加の検討や、周辺市との連携による目的地の分散、連携強化が求められる。

「「地域との調和」につながる行動に積極的に取り組まれている事業者の割合」等が低調であり、事業者側の実践が十分ではないのは懸念である。「持続可能な観光を实践する地域人材の育成・創出」「持続可能な観光サービスを提供する事業者への支援」などに関わる施策の拡充が求められる。

最後に、令和6年度 第二次編成予算における観光関連事業については、本年度の新規施策や拡充した施策に関して、趣旨や内容など、概ね賛同できるところである。

(若林委員長)

私から2点ほどお示ししたい。

1点目は、持続可能な京都観光として何をを目指すのかについて。仮に目標に掲げないとしても、各指標がそれぞれの取組においてどのように推移しているのか、年単位で定点観測し、経過を見る必要がある。

例えば観光の目的について、単に物見遊山的な観光ではなく、京都の文化財や伝統工芸に触れることを重視するのであれば、日本人・外国人毎にモニタリングすべき。市民意識調査についても、迷惑に感じた割合だけを調査するのではなく、「観光客と対話し触れ合う機会があったか」など、ポジティブな側面も調査すべき。個人的には、せっかく観光に来ているのに地域住民と一言も話さずに帰るのはもったいないと思う。「ガイドが面白かった」という体験は、日本にはない観光スタイル。例えばヨーロッパのようにガイドを上手く活用することが重要ということであれば、関連数値を指標化してモニタリングする必要がある。

2点目は、グローバル基準を満たした指標とする必要があることについて。グローバル化する観光のサステナビリティの議論の中で、JSTSD（GSTCD）やMICEにおけるGDS-Indexを無視することは望ましくない。全てとは言わないが、国際基準で設定されている指標をある程度意識した設計とするとともに、仮に指標に位置付けないとしても、継続把握に努め、聞かれたら答えられるようにしておくことが必要。

(事務局)

大変示唆に富んだ御意見をいただき、御礼申し上げます。

次回のマネジメント会議においては、いただいた御意見の集約とともに、あるべき目標値の姿を御議論できるよう、準備を進めてまいります。また、令和6年度事業についても、いただいた御意見を参考に、全庁でしっかりと取り組んでまいります。

(以上)